

*庭師？世界を歩く＜ポルトガル編＞

2019年2月18日～3月1日、今回はポルトガル共和国国内を、北部の街ポルトからコインブラ、バターリャ、ナザレ、アルコバサ、オビドスと大西洋岸を南下。そしてリスボンの東部、スペインとの国境に近いアレランテージョ地方へ・・・最後はユーラシア大陸最西端の地、ロカ岬へ・・・主に世界遺産を巡る旅です。期間中、好天？に恵まれましたが、朝夕や陽が陰ると肌寒さを覚え、コートを手織りました。

今回の旅で見かけた主な樹木ですが・・・丘陵地帯ではコルクガシ(ブナ科コナラ属)とオリーブ(モクセイ科オリーブ属)、幹線道路沿いではユーカリ(フトモモ科ユーカリ属)、アカシア(マメ科アカシア属)、エニシダ(マメ科エニシダ属)それにマツ(マツ科マツ属)。ガイド嬢によれば地中海マツだそうです但未確認です。そしてポルトではツバキ(ツバキ科ツバキ属)。

ビスケット、コンペイトウ、ポタン、キャラメルなどポルトガル語が日本語になっている単語も多い国。

* 第1～2日目 (2月18日・19日)

2月18日(月)、伊丹11:00発の全日空NH022便で、羽田へ。出国手続きを終え、羽田15:20発のルフトハンザドイツ航空LH717便でドイツのフランクフルトへ。今回は乗継ぎ地のフランクフルトで一泊。翌日フランクフルト09:45発のルフトハンザドイツ航空LH1176便でポルト空港～フランシスコ・ザ・カルネイロ空港

(11:30着)へ。到着後、早速ポルトの市内観光へです。

ポルトの街・・・ドウロ河沿いに発展した街で、ポートワイン発祥の地。とは言っても、ブドウ栽培は上流。かつてはポルトまで運び、ここから各地へ・・・。ともかく、全体が坂道と行っても過言ではない街。しかも、石畳。歩きにくいこと・・・。最初に訪れたのはサン・ベント駅。構内の壁面はポルトガル



写真上左：サン・ベント駅構内のアズレージョ / 写真上右：カルモ教会

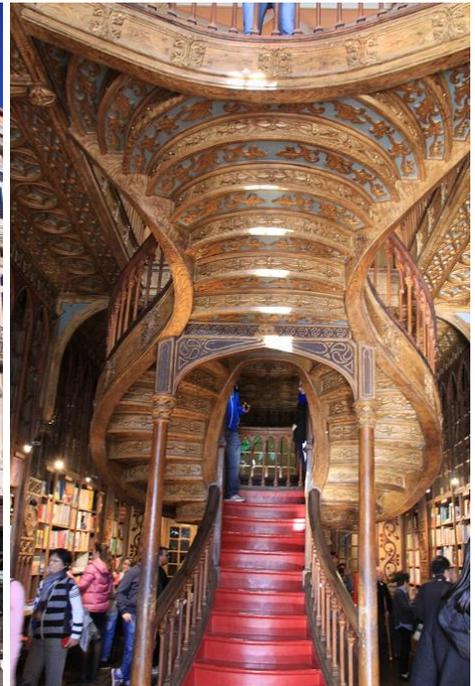
の歴史が描かれた見事なアズレージョで飾られていました。約20,000枚も使用されているそうです。

ポルトガルと言えばアズレージョ。一言で言えば、上薬をかけて焼かれたタイルですが・・・。貼合せて宗教画などを表現。青色の世界ですが、濃淡や線の表現など、貼合せとは思えない技術に圧倒されました。素晴らしい技術です。15世紀に、スペインを經由してムーア人がポルトガルにもたらしたそうです。

カルモ教会のアズレージョは国内最大級とか・・・。ここには二つの教会がありました。正面左はカルメル教会、右がカルモ教会。さらに二つの教会の間約1mには、1980年代まで住民が住んでいたという民間住居。カルモ教会に入ってビックリです。外観からは想像もできないほど、キンピカ。大航海時代の富が注がれているそうです。

次いで訪れたのは、人気の観光スポットとなっているレロ書店。1869年に創業、1906年以来、現在の場所で営業を行っているそうで、世界で最も美しい書店の一つに数えられているそうです。

ネオゴシック調の建物で、書棚に囲まれた空間の中央にあるユニークな形状の赤い階段は、「天国への階段」と呼ばれているそうです。



写真上左：レロ書店 / 写真上右：レロ書店内の階段

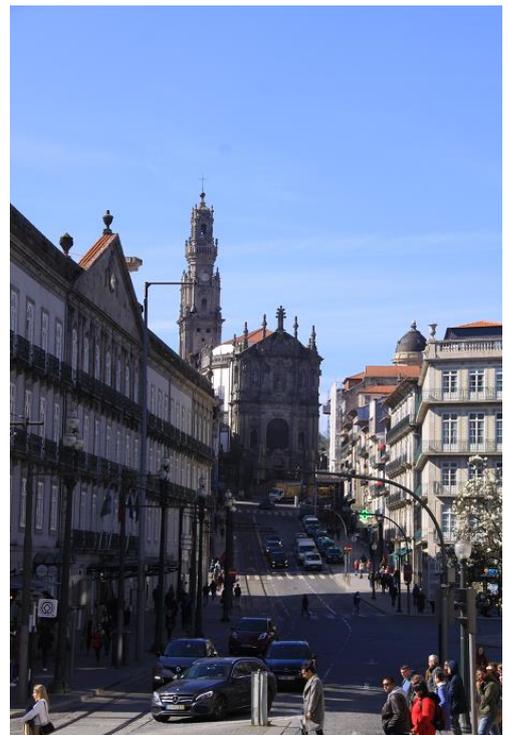
また、ハリーポッターの世界観のモデルになったのではとも・・・。その秘密はハリーポッターの作者が執筆活動を行った時期に、「レロ書店」のすぐ近くに住んでいたことがあるのだとか。作者が実際にインスピレーションを受けたかの真偽は定かではありませんが・・・。この書店、なんと5ユーロの入店料が必要でした。ただし、買い物をすれば、料金の一部となります。



写真上：ペドロ四世騎馬像と市庁舎

写真右：クレリゴス教会とクレリゴスの塔

～いずれもリベルダーデ広場にて



クレリゴス教会は、18世紀に建てられたバロック様式の教会。76mあるクレリゴスの塔はポルトガルの高さだそうです。

今日の昼食は、ポルト郊外のパラシオ・ド・フレイシヨで・・・。ポサーダです。内装もロケーションも素晴らしいところでした。18世紀のバロック様式のフレイシヨ宮殿のロビー棟と、19世紀の製粉工場の宿泊棟で

構成されているそうです。

ポルトの市電ですが・・・現在は3路線運航されているそうです。



写真上：パラシオ・ド・フレイショ

写真左：18番路線の市電(カルモ教会前にて)

写真下：モクレン～シモクレン(モクレン科モクレン属)

ポルト市内至る所でモクレン(モクレン科モクレン属)の花が咲いていました。ほぼ満開です。コブシ(モクレン科モクレン属)やツバキ(ツバキ科ツバキ属)の花も・・・

ツバキですが、日本と関わり深い花のようです。少し、調べて見ました。

ツバキの原産地は、中国、韓国、日本、その他の東南アジア諸国。ツバキを最初に欧州に移植したのは、ポルトガル人だと言うのが定説だそうです。ポルトガルではツバキが酸性土、雨の多い地方に適しているため、北部に多く見られるのだそうです。ちなみに、ポルトを出ると、皆無に近い程見かけませんでした。気付かなかったのかも・・・



ツバキはポルトガル語では「Camelia (カメリア)」ですが、Japoneira (ジャポネイラ) や rosa de Japao (日本のバラ) の俗名があります。特にポルトガル北部では Japoneira がよく使われているようです。カメリアの語源は、ジェズイット団宣教師ゲオルグ・カーメルに因むそうです。

カーメルが中国からツバキの種をヨーロッパに送ったとの記録もあるそうですが、一方では、遣隋使の小野妹子が隋帝国第二皇帝にツバキを献上したと言われ、隋では、海の向こうから来た「ざくろ」、海石榴(うみざくろ)と呼んだとも。さらに、7～8世紀の万葉集には既に「ツバキ」の表記があり、ツバキを詠んだ歌もあることから、元々は日本古来の植物であったのではと言えるそうです。

日本の戦国時代、日本で殉教した宣教師が1626年にポルトガルに送った書簡に、日本の国名を Japon と書いてあり、当時は「ジャポン」であった事がわかります。このことから「Japoneira」が日本の国名から派生したと、ツバキの苗が最初に中国からではなく、日本から持って来たことが推測されるそうです。

* 第3日目 (2月20日)

今日はポルト二日目。市内観光とドウロ河クルーズ、ワインセラー見学と試飲他です。

ホテルを出て、まずはドン・ルイス一世橋を渡り、市内の目抜き通り、サンタ・カタリーナ通りへ。当初は、ボリャオン市場(生鮮食品から日用雑貨などが手に入る市民の市場)を訪れる予定でしたが現在改装中。このため

北部にある臨時の市場へ。ここから、そぞろ歩きで南下。ここにもアズレージョで装飾されたアルマス礼拝堂とサント・イルデフォンソ教会が建っていました。

サント・イルデフォンソ教会は、バ

ターリャ広場の象徴的建物で、約10,000枚のアズレージョで装飾。ア

ルマス礼拝堂は、18世紀に建設が始められ、19世紀から20世紀に修繕・改築工事が行われ、今の姿に・・・内部はネオクラシック様式で、聖フランチェスコと聖カタリーナの生涯が描かれており、使用されているアズレージョは約16,000枚だそうです。

引き続いてサン・フランシスコ教会へ・・・サン・フランシスコ教会は14世紀に建造された時はゴシック様式。内部は17世紀にバロック様式に改装されたそうです。この教会の内部も金で覆われていました。ターリャ・ドウラーダ(金泥細工)と呼ばれるバロック様式の装飾だそうです。

教会奥の塔は隣接するボルサ宮(元証券取引所)の一部。教会から徒歩1分?にあるレストランで昼食。その後はドウロ河クルーズです。ドウロ河クルーズの楽しみは、ドン・ルイス一世橋を河面から観賞できる事。

ドン・ルイス一世橋は、世界遺産「ポルト歴史地区」に含まれ、ポルトの中心部とヴィラ・ノヴァ・デ・ガイア地区を結んでいる橋。エッフェルの弟子が設計し、1881年から1886年の間に建設されたアーチ橋。幅



写真上左：サント・イルデフォンソ教会

写真上右：アルマス礼拝堂

写真右：早朝のサンタ・カタリーナ通り



8mの2階建て構造で、現在上層は歩行者とメトロ用に、下層は自動車と歩行者用になっています。

1886年と言えば、日本では、3年後に大日本帝国憲法が公布されています。綺麗なアーチ橋です。素晴らしい建築技術に驚きま



写真上：サン・フランシスコ教会と一番路線の市電

写真右：サン・フランシスコ教会(世界遺産)



ドン・ルイス一世橋(世界遺産)とノッサ・セニョーラ・ド・ピラール修道院

写真上左：(クルーズ船発着場から) / 写真上右：上流から

した。

下船後、船着き場から徒歩数分のワインセラーへ・・・ポルトはポートワインの発祥の地。ポートワインとは、ポルト港から出荷される特産の酒精強化ワインのこと。醸造過程でアルコール(酒精)を添加することでアルコール度を高めたワインのことで、日本の酒税法上では甘味果実酒に分類されます。赤と白があり、赤は輝くルビー色で「ポルトガルの宝石」とも・・・一般に、白は「食前酒」としておつまみなどと一緒に、赤は「食後酒」としてチョコレートや葉巻などと一緒に飲まれているそうです。赤・白両者を試飲しましたが、赤はとにかく甘〜いタイプでした。

ポルトガル政府は、北部のドウロ河上流(アルト・ドウロ地区)で栽培された葡萄を原料とした酒精強化ワインのみにポートワインの商標を認めるとともに、ポートワインの品質も政府機関で厳しく管理されているそうです。日本でもかつては、ポートワインを名乗る甘味果実酒が多かったとのことですが、現在は赤玉ポート

ワインが赤玉スイートワインとなったように商品名を改めています。

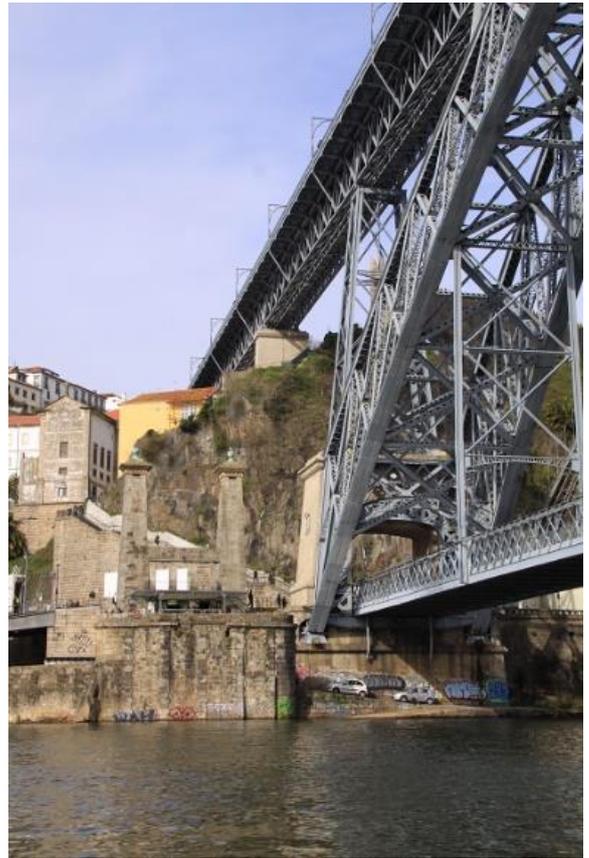
かつては、上流で造られたワインを小型の帆船(ラベロー)でポルトまで運んでいたそうです。今は河に浮かぶモニ



ドン・ルイス一世橋

写真上：ピラールの丘にて

写真左：クルーズ船にて



写真上左：ノッサ・セニョーラ・ド・ピラール修道院～クルーズ船にて

写真上右：ポルト旧市街～ピラールの丘にて



ュメントとして利用されていました。

ワインセラー見学の後はロープウェイでピラールの丘へ・・・。

* 第4日目 (2月21日)

今日は、ポルトから南下して、コインブラとバターリャを巡り、大西洋岸のナザレ泊です。

コインブラまでは約1時間30分のバスの旅です。途中、ユーカリ(フトモモ科ユーカリ属)やアカシア(マメ科アカシ



写真上：ワイン運搬船～ドウロ河畔にて

ア属)、エニシダ(マメ科エニシダ属)を、いたる所でみかけました。と言うよりは、延々と・・・が当てはまる状態です。

ユーカリはパルプの原料のため、オーストラリアから輸入・植林された植物だそうです。積極的に植林を拡大した結果が、現在の景観を生み出したようです。

紙の値段の下落や山火事(ユーカリは油分も多く、毎年、山火事が多く発生する原因の一つだとか)や砂漠化などの理由で、最近植林地を取り除くという動きが出てきているそうです。ユーカリを植えると、その後7年間は他の木が育たないことも・・・。地下70mまで根は伸び、地中の栄養や水分も取って砂漠化してしまうという問題があるそうです。

ユーカリにも音を遮断するため騒音防止に役立つとか、ユーカリの葉は、防腐作用、熱作用、内用すると喘息、気管支炎にも効くなどの良いところがあるそうです。が、取りすぎると逆効果になるので要注意だそうです。ミツバチが集めるユーカリの花の蜜は、喉の痛み、咳止めなどに効きそうです。



写真上：ユーカリの小枝
(フトモモ科ユーカリ属)

コインブラです。コインブラは丘の上に広がるコインブラ大学を中心とした街。法学部や薬学部は世界でトップクラスとか・・・。また、コインブラ・ファドの街でも・・・。

鉄の門を抜けると旧大学内へ・・・。広々とした中庭を囲むように回廊や礼拝堂が並び、時計台に向かって左手前には1724年に建て

られたジョアニア図書館がありました。蔵書は約30万冊とか・・・。勿論、今でも利用されていました。内部は豪華・・・。ただし、照明設備はなく、今でも窓から入る光で・・・。



中庭ですが、かつては樹木を植栽した庭



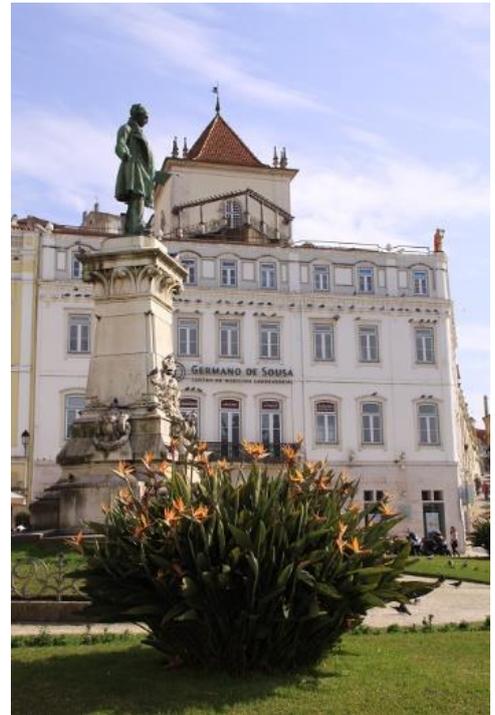
写真上：コインブラ大学～モンデゴ川対岸にて

写真左：鉄の門

写真下：時計塔とラテン回廊と中庭



園？だったそうですが、政界の偉い方が施設を利用する際、駐車場がないと言うことで伐採。この直後、世界遺産に登録されたので、修復もできないとか・・・。



写真上左：フェレイラ・ボルジェス通りにて / 写真上右：ポルタジェン広場にて
写真上中：クラシックギターとポルトガルギター(右)

ファド観賞のため、大学を後にして市街へ移動。会場のFado de Centoroへはポルタジェン広場からフェレイラ・ボルジェス通りの途中にある城門を経て・・・まず、広場近くの金平糖のお店で試食と・・・ご存じのように、コンペイトウの語源はポルトガル語のコンフェイト(球状の菓子の意)から。金平糖はカステラなどとともに南蛮菓子としてポルトガルから日本へ伝えられたとされています。初めて日本に金平糖が伝わった時期については諸説あるようですが、戦国時代の1546年(天文15年)とも・・・。

ポルトガルにはコインブラ・ファドとリスボン・ファドがあります。コインブラ・ファドのファディスタ(歌手)は男性。リスボン・ファドでは女性だそうです。

ファドはポルトガルに生まれた民族歌謡。ファドとは運命、宿命を意味し、このような意味の言葉で自分たちの民族歌謡を表すのは珍しいそうです。レストランなどで歌われる大衆歌謡で、日本の演歌に相当するとか・・・。

主にファディスタが歌い、民族楽器のポルトガルギター(ギターラ)とクラシックギターが演奏を・・・勿論、生演奏を楽しみました。

コインブラ市内で見かけたプラタナス(スズカケノキ科スズカケノキ属)の街路樹です。大胆に、バッサリ・・・ポルトガルだけではなくヨーロッパでは良く見かける光景です。かなりの樹齢です。

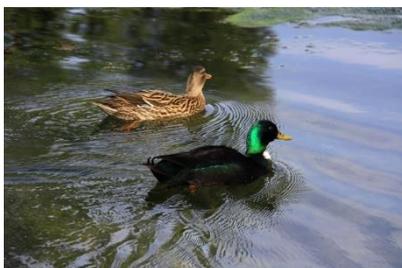


写真上左：ゴクラクチョウカ

(ゴクラクチョウカ科ゴクラクチョウカ属)

写真上右：プラタナス(スズカケノキ科スズカケノキ属)

ゴクラクチョウカ(ゴクラクチョウカ科ゴクラクチョウカ属)は、熱帯地方で生育する植物ですが・・・。ポルトガルでは、南方系の植物が比較的良く育つそうです。ちなみにアカシア(マメ科アカシア属)も南方系です。

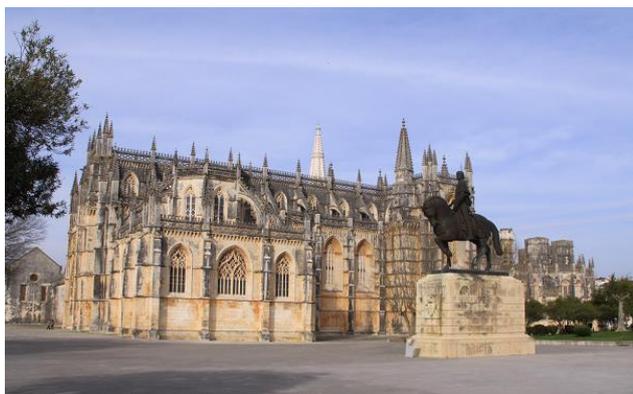


写真上/写真左/写真右：
涙の館にて



昼食に訪れたレストラン キンタ・ダス・ラグリマスに併設されていた涙の館の芝庭の一角にありました。涙の館や泉は、14世紀に起きた国王の息子と政略結婚相手の王女の侍女との悲恋物語の舞台だそうです。

バターリャは、コインブラから約1時間のバス移動です。



バターリャの修道院。世界委遺産です。正式には「聖母マリア修道院」。バターリャとはポルトガル語

写真上左/写真上右：バターリャ修道院

で「戦い」だそうです。スペインに対してポルトガルの独立を守った歴史的な戦いの勝利を、聖母マリアに感謝を捧げるために建立されたそうですが・・・。ポルトガルにおける後期ゴシック建築の傑作で、マヌエル様式も用いられています。いまだ未完の礼拝堂も・・・(壁はあるのですが屋根がありません)。

未完の礼拝堂は、リスボンの新しい教会建設を優先させたため、建築途中で打切られたとか・・・。なんと、棺も納められていました。雨露には晒されてはいないようですが、風には・・・。マヌエル様式は、15世

紀後半から16世紀のポルトガルで流行した建築様式。建物の空間を規定する建築様式ではなく、後期ゴシック建築に付随する装飾手法の一種と見なされる場合もあるそうです。

建物には船や海に関する装飾が施され、地球儀、鎖、ロープの結び目、舷窓の蓋、波、サンゴ、海草、インドや南アメリカの植物、人間、宗教などがモチーフとされているそうです。代表的な建築物に、後日訪れる予定のリスボンのジェロニモス修道院があります。



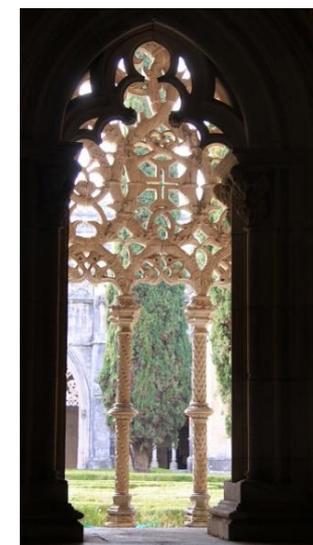
写真上左：未完の礼拝堂(内部) / 写真上右：未完の礼拝堂(外部)



写真上左：王の回廊と中庭

写真上右：回廊の装飾

写真左/写真右：回廊にて



駐車場でブラシノキ(フトモモ科ブラシノキ属)を見かけました。が、当初、名前は不明でした。帰国後も、何かのツボミ、しかもよく見かける葉……。緑友会のSNSに投稿したところ、会員の方からブラシノキと……。ブラシノキは赤いブラシのように咲く花のイメージが強く、そのツボミを連想することはできませんでした。別名カリステモン、キンポウジュ(金宝樹)、ハナマキ(花楨)。オーストラリア原産。



写真上：ブラシノキ
(フトモモ科ブラシノキ属)

* 第5日目 (2月22日)

今日は宿泊地のナザレからアルコバサ、オビドスを巡ってナザレに戻ります。



写真上左：シティオの丘からプライア地区
 写真上右：ノッサ・セニョーラ・ダ・ナザレ教会
 写真左：シティオの丘にて

ホテルを出て、まず、ナザレのシティオの丘へ・・・ここから美しいナザレの海岸が一望できました。

現在の海岸(砂浜)は造成されたもの。以前の海岸線は、後方の丘の麓。旧市街はシティオの丘から続く丘の上。今で言う、リゾート開発された地域が丘の下に拡がり、いまでは市の中心。

ノッサ・セニョーラ・ダ・ナザレ教会は、1377年に現教会の元になる聖堂が建設され、現在の建物は17世紀に建てられたそうです。内部には旧約聖書を題材とした18世紀のアズレージョで飾られています。

ナザレからアルコバサへ・・・アルコバサ修道院(世界遺産)見学です。正式にはサンタ・マリア・デ・アルコバサ修道院。ここにはコインブラで紹介した涙の館の悲恋の二人の棺が、祭壇を挟んで足を向け合う形で納められています。最後の審判が下って起き上がった際



写真上左：中庭とドン・デニスの回廊
 写真上右：ドン・デニスの回廊にて
 写真右：アルコバサ修道院

に、最初に観る相手がイネスであることを望んだペドロ一世の遺言だそうです。

最初にこの修道院が目に入った際、少い変だな？と・・・。ファザードの前の構成が違っていました。四隅に小塔を設けた小さな広場がファザードの前にありました。東南アジアの仏教寺院では見かけたことがあります、ヨーロッパの教会では・・・。今まで見慣れた教会の正面の構成とは少し様子がちがうので、ガイド嬢に「何か理由でも・・・」と質問。回答無し。ネットでも調べてましたが、今のところ・・・。



写真上：ムーアの要塞跡

中庭にオレンジが実っていました・・・。そのままでは渋くて食べられないので、修道士がマーマレード等加工して食べたそうです。甘いものを摂り過ぎると太る？・・・。食堂には体の太さをチェックするための特別な入り口がありました。ここが通れない修道士には食事制限が課せられたとか・・・。今はどうでしょうか？

ファザードから丘の上に要塞跡らしきものが・・・。ムーアの要塞跡だそうです・・・



写真上左：コルクガシ(ブナ科コナラ属) / 写真上中：同 葉 / 写真上右：同 樹皮

修道院の前にある4月25日広場の一角でコルクガシ(ブナ科コナラ属)を見かけました。現物を目にしたのは始めてです。後で訪れるアレンテージョ地方は、コルクガシの栽培地が広がっているとのことでした。

コルクガシは常緑高木です。アベマキ(ブナ科コナラ属の落葉高木)からもコルクは採れるそうですが、コルクガシの場合、コルク層は25cmにもなり、樹齢20年に達したコルクガシのコルク層を剥ぎ取っても生育は障害されず、再び厚いコルク層が再生されるそうです。樹齢約25年になったコルクガシから初めて商用のコルク層が収穫される(バージンコルク)そうです。2度目の収穫はその9年から12年後。その後150年から250年ほどに渡ってコルク層を収穫することができ、1本のコルクガシはその生涯に約12回の収穫を行うそうです。ポルトガルでは、採取した際、幹に採取年を標記し、9年後以降に再採取して出荷するそうです。実際に

白ペンキで数字が書かれていました。例えば「6」とか・・・これは2016年に採取した樹を示すそうです。日本で、建築資材として植林するスギなどを思い出します。幼木から初出荷まで、一世代・・・

ワインのコルク栓は樹皮を打ち抜いて造るそうです。打ち抜いた後の端材は、粉碎して成型加工され、フローリング用床材や断熱材など、様々な用途に・・・コルクの生産量でポルトガルは全世界の生産量の約50%を占めるそうです。



写真上：オビドス遠景～車窓にて

昼食後は、アルコバサからバスで1時間弱の場所にあるオビドスへ・・・。

オビドスは「谷間の真珠」と呼ばれ、人口800人ほどの小さな街です。城壁に囲まれた街で、「その歴史はローマ時代に、海からの敵の侵入を防ぐために砦が築かれたことに遡るそうです。

街の最奥には城郭がありました。今はポサーダとして利用されているそうです。ご存知のように、ポサーダとは、かつての城や修道院などの歴史的建造物を改装し、近代的な設備を備え



写真上左：サンタ・マリア教会

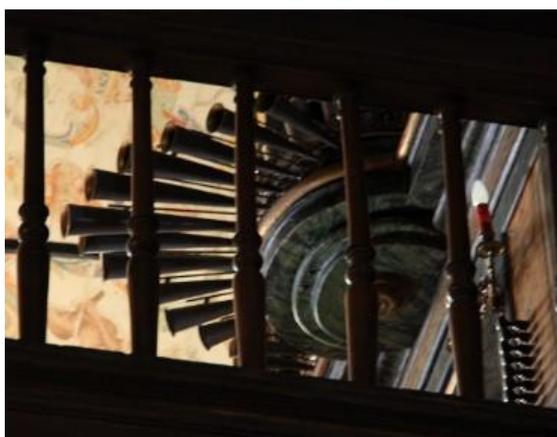
写真上右：城郭



写真左：水道橋～城壁にて

写真下左：サンタ・マリア教会のパイプオルガンの一部

写真下右：ポルタ・ダ・ヴィラの城壁にて



た宿泊施設などに利用されている施設。その特徴から4種類に分類され、現在、41施設あるそうです。

この街のサンタ・マリア教会のパイプオルガンですが、細いパイプが水平方向に向いていました。多分、高音域用だと思いますが・・・通常、パイプオルガンのパイプは垂直ですが・・・ポルトガル独自の構成だそうです。「なぜ？」の問いに、解答無し。ポルトガルへ来て始めて見かけたものの一つです。

ポルトガルでは、壁は石材、天井は板張りの教会が多いそうです。これは小生の推測ですが・・・残響の関係ではないかと・・・高音域では水平方向に音を出さないと、遠くまで届きにくいからでは・・・？今回の旅行で訪れた多くの教会が、このような構成でした。

水道橋もありました。今は使用されていないようですが・・・。

* 第6日目 (2月23日)



写真上：プライア地区とシティオの丘

写真左：ホテルでの朝焼け

写真下：プライア地区の海岸にて



今日はナザレを經ってリスボンの東方、スペインとの国境に近いアレンテージョ地方へ・・・。終日、バスに揺られての移動日です。

朝食のため、ホテルのレストランへ・・・。見事な朝焼け。早速カメラに納めました。



写真上左：車窓から見かけたコルクガシの畑 / 写真上右：アライオロスの城

スタートは、地元ナザレのプライア地区にある市場の見学から。見学後、ヴィラ・ヴィソーザに向けて・・・。途中、トイレ休憩に立寄ったアライオロスでは、街を見下ろすように城がありました。この街の特産は、ハン

ドメイドの絨毯。17世紀にペルシャから伝わった技法に、ポルトガル独自の色と柄を取り入れた独特の絨毯だそうです。今も、昔ながらの手法とモチーフを守りながら、代々、伝えられているそうです。

アライオロス近郊では、コルクガシの植林地が多くみられるようになりました。



写真上左：コルクガシの大木
 写真上右：レストラン
 写真中左：オリーブの盆栽
 写真中右：ブドウ畑
 写真下左：幼木 / 写真下右：成木



昼食に立寄ったエシウトレモシユ近くのレストランで見かけました。コルクガシ(ブナ科コナラ属)の大木です。大型バスと比較して、その大きさが・・・ここでは、コルクの採取はされていないようです。

このレストランですが、ワイナリーに併設されていて、勿論、昼食は自家製のワイン付きです。周囲には広大なブドウ畑が広がっていました。剪定後の成木には新芽が出かかっていました。幼木も・・・そしてレストランの入り口にはオリーブの盆栽仕立ても・・・。



* 第7日目 (2月24日)

今日は、ヴィラ・ヴィソザからスペインとの国境の街、モンサラーシュとエヴォラを訪れ、ヴィラ・ヴィソザに戻り



写真上：オリーブ畑
 写真右：モンサラーシュ



ます。

モンサラージュへの窓越しに見かけました。オリーブの樹の下に岩が積み上げられていました。周囲のオリーブの下にも・・・。アレンテージョ地方は、石灰岩の上に広がる地。少し掘れば・・・。考えてみると、オリーブやコルクガシ以外には生育しにくい地質なのかも・・・。反面、大理石の主産地でも・・・。

モンサラージュの街は、標高 332m の小高い丘の上に広がっています。スペインとの国境までは数キロ。かつてはムーア人の要塞。ポルトガルで最も美しい街と唱われ、日暮れ時とやや遅めの朝には沈黙の音がすると・・・。こんな表現を見つけました。「日没の瞬間、音のない村に“ジュッ”という音が聞こえそうな気がする・・・」。住人は現在 37 名とか・・・。



写真上左/写真上中：モンサラージュの街

写真上右：望楼

写真左：石畳の路

写真右：グアディアナ河とモウラン城

写真下左：城壁からの眺め

写真下右：グアディアナ河



グアディアナ河の対岸にモウラン城がかすかに・・・。ここもポルトガル。かつてはモンサラージュ同様、軍事的な重要拠点だったようです。城壁の上からの眺めは最高。アレンテージョの様子が良く解ります。

城郭内外は石が敷き詰められた石畳。歩くのに苦労しました。雨が降ると、さらに歩き辛いのでは・・・。今回は好天に恵まれましたが・・・。望楼の下には闘牛場がありました。

ポルトガルでは、アーモンドもアロエも花盛りでした。アーモンドはモンサラージュの駐車場で一株見つけ

ました。よく見ると、駐車場を挟んで反対側には多くのアーモンドの花が・・・アロエは城内へ向かう途中の道路脇の花壇で・・・ちょうど開花シーズンでした。

アーモンドとサクラの見分け方ですが・・・サクラの花は花柄が非常に長く、アーモンドの花は花柄が非常に短く、枝に沿うように花を付けるのが特徴です。

アロエは現在まで、500種以上が知られているそうです。日本には鎌倉時代に伝来したようです。



写真上左：アーモンド(バラ科サクラ属)

写真上右：アロエ(ススキノ科アロエ属)

エヴォラも小高い丘の上です。1584年、日本からの天



写真上左：エヴォラの街と大聖堂

写真上中：城門

写真上右：大聖堂

写真左：ディアナ神殿と

大聖堂の塔

写真右：ディアナ神殿

写真下：水道橋



正遣欧少年使節団がリスボン訪問の後、ここを訪れ、8日間滞在した街です。

ここには2～3世紀に、ローマ人が作ったローマの神殿がありました。かつてローマが納めていた証です。

大聖堂は12～13世紀に建てられた建物で、エヴォラに着いた遣欧少年使節の4人は、この大聖堂でパイプオルガンの演奏を聞いたそうです。パイプオルガンを演奏したとの説も

あるそうです。

ここにも水道橋がありました。この先にあるサント・アントニオ要塞に繋がっているそうです。

コルクガシの街路樹は、モンサラーシュからエヴォラへの途中、エヴォラの近郊で見かけました。広大な栽培地に植えられている風景は多く見かけましたが、街路樹としての植栽は始めてです。



写真上：コルクガシの並木

* 第8日目（2月25日）



写真上左：ヴィラ・ヴィソーザ城からレプブリカ広場 / 写真上右：ヴィラ・ヴィソーザ城

早いもので、8日目。今日はヴィラ・ヴィソーザを経ってリスボンへ・・・



少し早い目の起床。朝食前の一運動として、ヴィラ・ヴィソーザ

写真上左：オレンジの街路樹



写真上右：公爵の館

の市内散策へ・・・と言っても、人口5,000人ほどの小さな街・・・ともかくお城へ・・・

写真下：公爵の館附属教会

今回、宿泊したホテルの前に天正遣欧少年使節も滞在したという公爵の館（現在は博物館）がありました。生垣を境界に、敷地もお隣です。



オレンジの街路樹を見かけました。今まで、アチコチで見かけましたが、カメラに納めるチャンスが無く・・・

「渋くて、とても食べられるものではない」と聞かされていましたが、たしかコインブラでは落果を食べてい

る方を見かけました。

外路樹としては、ギリシャやスペインでも多く見かけた記憶があります。

ポサーダ・コンベント・ヴィラ・ヴィソーザは、今回、宿泊したホテルです。

ヴィラ・ヴィソーザ郊外には、大理石を切り出している丘がいくつも見られました。街への道路沿いには、加工工場も・・・そしてオリーブ畑。奥の少し色の濃い場所はコルクガシの畑のようです。

アレンテージョ地方は大理石の宝庫？ローマ時代から利用されているそうです。

ご存じのように大理石の源石は石灰岩。石灰岩（堆積岩）が地殻変動による熱や圧力を受けて再結

晶化し、特性や見た目が変化したものが大理石。産地によって色や模様（マーブル模様）が異なるそうです。石灰岩と同じように炭酸カ



写真上左：オリーブ畑とコルクガシの畑 / 写真上右：大理石切出し中の丘

ルシウムを主成分とした石材です。このため、酸に弱いという面も・・・。炭酸カルシウムは弱アルカリ性。オリーブ栽培に適した土壌。ブドウなども・・・。ちなみに、石材は、火成岩・堆積岩・変成岩の三種類に分類され、大理石は変成岩の仲間になります。

ヴィラ・ヴィソーザからバスに揺られて約2時間、昼前にリスボン郊外へ・・・。

最初に訪れたのは、テージョ河を挟んで旧市街の対岸にあるクリスト・レイの丘。ここには台座を含めて高さ110mのキリストの像が



写真上左：クリスト・レイ / 写真上右：4月25日橋

立っていました。リオデジャネイロ(ブラジル)のキリスト像を模したとか。河に懸かる橋は4月25日橋。1966年に開通した全長2277mの吊り橋。自動車と鉄道の併用橋。1974年4月25日のクーデターを記念して

改名されたそうです。青空にも恵まれ、この丘からの素晴らしい眺めを堪能しました。

リスボン近郊でテージョ河に懸かる橋は、この橋と、少し上流に懸けられているヴァスコ・ダ・カマ橋の二橋。1998 に完成した全長 17.2 km の斜張橋でヨーロッパ最長だそうです。ナザレからアレンテージョ地方に移動する際、利用しました。本当に長〜い、橋の終りは、まあ〜だ？と思いつつ揺られていました。

4月25日橋を渡ってリスボンの旧市街へ・・・。バイシャ地区のレストランで昼食後、名物？のケーブルカーでサン・ペドロ・デ・アルカンタラ展望台へ・・・。リスボンの街もポルト同様、旧市街は坂の中。ケーブルカ



写真上左：バイシャ地区 / 写真上右：サン・ジョルジェ城～サン・ペドロ・デ・アルカンタラ展望台にて

で約5分？の丘にある展望台。ここからの眺めもまた、素晴らしい。旧市街が一望できました。リスボンは7つの丘の街とも・・・。谷間を挟んだ丘には展望台があるそうです。ちなみに、ケーブルカーは、1892年に開通。平均斜度18度だそうです。

今日は、ここからが大変でした。名物のトゥクトゥクで市内

観光。トゥクトゥクとは、三輪バイク（かつて日本でも「ミ؟؟ト」と呼ばれていた三輪自動車）を改造したミニタクシー。

細くて入り組み、坂道の多い街を座ってユッタリと観光。とは思いきや、まるで神風タクシ



写真上左：ケーブルカー / 写真上右：レスタウラドーレス広場

ー？石畳の上を、飛ばすは飛ばす、その上急停車に急発進、カーブも何のその（少しオーバーですが）。1時間ほどの利用でしたが、観光どころか、振り落とされまいと必死。胃の中が上下左右に・・・。さすがに、赤信号では止まりましたが・・・。この時が周囲を見るチャンス。後で調べて見ると、たしかに広範囲にある観光スポットは廻っていたようです。さすがに、乗車中の写真はゼロ。疲れました。

ところで、リスボン地震をご存じでしょうか？1755年11月1日にリスボンの南にあるサン・ヴィセンテ岬の西南西約200km沖を震源とするマグニチュード9.0クラスの大地震。ポルトガル全土だけではなく、ヨーロッパやアフリカにも大きな被害をもたらしたそうです。リスボンでは15mを超える津波などで9万人が死亡(当時のリスボンの人口は27万5000人)。直接の死者は3万人。欧州史上最大の自然災害で、リスボンでは、いまだ修復のできていない教会もあるそうです。ポルトガルの他の街では30mの津波も・・・。大きな地震は、過去数回起きています。



写真上：リスボンの夜明け～滞在ホテルにて

この原因とみられるのがイベリア半島沖にあるマイクロプレートだそうです。これが原因で、2億5000万年後には、アメリカ大陸とユーラシア大陸が陸続きになると言う説も・・・。現在は、大西洋中央海嶺のため、2.5cm/年、両大陸は離れつつあるはずですが・・・。プレートの動きは恐ろしい。

* 第9日目 (2月26日)

リスボン観光二日目です。今日はリスボン西部ベレン地区へ・・・。大航海時代を代表する歴史的建造物が残されている地区です。



写真上：モニュメント

そして夜はファド観賞ディナー。今日も晴天に恵まれそうです。

最初に訪れたのは1520年に完成したベレンの塔。かつてはテージョ河を航行する

写真右：ベレンの塔

写真下左：4月25日橋と

クリスト・レイの丘

写真下右：ヨットハーバー





写真上左/写真上右/写真下左/写真下中/写真下右：発見のモニュメント

船の監視と要塞の役目も・・・。

もともとは河の中。今は陸続き。

停車中のバスすぐそばに・・・。陸に向かってヒレを前足ののように・・・。何処へ？

発見のモニュメント。1960年にエンリケ航海王子の500回忌を



記念して造られたそうです。エンリケ航海王子を先頭に、天文学者、宣教師、船乗り、地理学者など大航海時代に活躍した人々が・・・。バスコ・ダ・ガマは勿論フランシスコ・ザビエルも・・・。

航海王子自らは航海しなかったそうです。が、その生涯で、探検事業家、パトロンとして航海者たちを援助・指導し、それまで未知の領域だったアフリカ西海岸を踏破させるなど、大航海時代の幕を開いたそうです

ジェロニモス修道院・・・。エンリケ航海王子とバスコ・ダ・ガマの偉業を称え、また新天地開拓に向かう航海の安全を祈願して1502年に着工。約一世紀をかけて完成した修道院。マヌエル様式の代表作だそうです。



写真上左/写真上右：ジェロニモス修道院

王家の霊廟になっており、マヌエル一世が葬られている他、バスコ・ダ・ガマの棺も安置されています。

建築資金は最初バスコ・ダ・ガマが持ち帰った香辛料の売却による莫大な利益によって賄われ、その後も香辛料貿易による利益によって賄われたそうです。

ジェロニモス修道院前のインペリオ広場で見かけました。



写真上：ジェロニモス修道院

写真右：修道院南門



写真上/写真右/写真下：回廊

ジャカラнда（ノウゼンカズラ科キリモドキ属）です。種子が垂れ下がっていました。花の季節には、まだまだのようです。



修道院見学後は、修道院の近くにあるサッカースタジアムのレストランで昼食。残念ですが、試合は・・・。

昼食後、国立古美術館へ・・・。正式にはムゼウ・ナシオナル・デ・アルテ・アンティガ。一般的には、頭文字をとってMNAAと。国内で最も重要な美術館だそうです。17世紀に建てられた宮殿を改装したもので、1884年に設立されたそうです。

ここには、日本からポルトガルに渡った南蛮屏風があります。狩野内膳作の桃山文化の最高傑作といわれる16世紀末から17世紀の屏風絵。インドのゴアで出航準備をするキャデラック船と、



写真上：ジャカラнда

（ノウゼンカズラ科キリモドキ属）

それが長崎・平戸に到着した様子が対の屏風に描かれており、当時の様子を伝える貴重な資料となっているそうです。



写真上：国立古美術館

写真左：国立古美術館にて



* 第10日目 (2月27日)

早くも10日目。観光最終日です。今日はリスボンの西に隣接するシントラからロカ岬へ・・・。シントラ市街はリスボンからバスに揺られて約1時間。山の中の街です。

宮殿群や城跡を含むシントラの文化財は世界遺産に登録されています。市街地は小さいのですが、アップダウンが大きいなど、全域を廻るには・・・。今回は、主に王宮内の見学です。

この王宮ですが、少なくとも15世紀初頭から19世紀後半にかけてポルトガル王家が住み続けており、ポルトガル国内で最も保存状態の良い中世の王宮だそうです。

イスラム教徒がイベリア半島を支配していた頃、シントラには2つの城があったそうで、一つはシントラを望む丘の上に立つ城で、カステロ・ドス・モウロス(ムーア人の城、現在は廃墟)とムーア人支配者の住居(現在の王宮)。

王宮の2本の塔は台所



写真上左/写真下：王宮

写真上右：市庁舎 / 写真下右：シントラにて



の換気口。高さは33mだそうです。



写真上左ペーナ宮殿(右)とムーア人の城跡 / 写真上右：ムーア人の城跡

ペーナ宮殿は、典型的なロマネスクリバイバル建築様式とされ、中世に修道院として建てられたものの、度重なる落雷や地震の被害で崩壊した後、改築されたそうです。時には、ポルトガル共和国大統領と外国からの賓客の公的行事の場として使用されるとか・・・。



写真上：プリンセスの庭園～王宮にて
写真右：レガレイラ宮殿～王宮から

ロカ岬はシントラからバスで約40分。北緯38度47分、西経9度30分、ユーラシア大陸最西端の地。「ここに地果て、海始まる・・・」ポルトガルの詩人カモンイスが呼んだ詩の一節を刻んだ石碑が建っていました。

断崖絶壁の向こうは・・・大西洋、さすがに対岸は見えません。水平線のみ・・・最初に目にした人はどんな思いを・・・。「ここで世界も終わりか」と、また、「この海の先に何が？」エンリケ航海王子は後者の思いだったようです。が、彼がここ立ったか否かはわかりませんが・・・。

それにしても、切り立った崖が続いています。ポルトガルの大西洋岸はこのような崖が続いているのでしょうか？ナザレの海岸も崖でした。先日、偶然TVでポルトガル南部の景色が放映されていました。エンリケ航海王子の足跡をたどる内容でしたが、ここでも海岸線は崖でした。



写真上/写真右：ロカ岬にて



写真上：ロカ岬にて

写真右：ユーラシア大陸最西端の碑と

カモンイスの石碑



坂道の多いポルトやリスボン・・・。イベリア半島の生い立ちに興味を覚えました。2億5000万年後がそうであるならば、2億5000万年前は？

明日はリスボンを經ってフランクフルト經由で羽田へ。明後日(3月1日)には日本です。

～ 完 ～

2019年3月31日 by SM記

備考：今回は主に下記を参考資料として利用しました。

- ① Wikipedia、② 地球の歩き方(ダイヤモンド社)